



# 人々の「価値観」を変えられる 東京五輪で「環境アピール」を

財団法人 地球・人間環境フォーラム専務理事 **平野 喬**

2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会をいかに環境にやさしい五輪にするか、日本が目指す「循環共生型社会」を先取りした運営ができるか。内外のモデルになるような大会にしようというレポートが8月、環境省から発表されました。

13人の有識者のヒアリングも踏まえて作成されたレポートは「社会の仕組みや人々の価値観まで変え、持続可能な社会を構築していくことが必要である」「これを内外に波及させていくことが、これからの我が国に真の豊かさをもたらす道筋であり、また、世界が直面している課題に対する我が国のメッセージである」と強調しています。

環境省がオリンピックの開催に向けて、大変意欲的な環境対策を発信し、世界をリードするとまで言っているのには訳があります。2020年という年が、世界中が関わる環境問題の転換点になるかもしれないからです。私などは、体操ニッポンは復活するだろうか、水泳陣は金メダルをいくつとるだろうかと今から楽しみにしています。2020年は、地球の温暖化、生物の多様性という人類の未来を左右する環境問題について、世界各国が一齐に取り組み結果を発表する年でもあるのです。一つは気候変動枠組み条約で決めた温室効果ガスの削減目標年であり、もう一つは2010年に名

◀リユースカップが20万個も使われた祇園祭。伝統的なお祭りのごみ減量に貢献した



古屋で決まった生物多様性を守るための行動計画の達成目標年なのです。二つの目標が達成できているかどうかによって、環境五輪の明暗が分かれてしまいます。日本はオリンピック開催地に立候補した段階から「環境にやさしい五輪」を前面に出していたわけですから、環境面でも金メダルをとらないことには約束違反になってしまいます。

## 「良い遺産」を残す責務がある

さて、その中身ですが、環境インフラとして、再生可能エネルギー、水素の供給設備、公共交通機関、生態系の有する防災・減災機能等を充実させることなどが挙げられ、個別にはマラソンコースの緑化、PM2.5や光化学スモッグ対策の推進、トリアスロンが行われる東京湾の再生、3R(リデュース・リユース・リサイクル)の推進など盛りだくさんです。1994年、オリンピック憲章に初めて環境配慮の項目が加えられ、同年に開かれたリレハンメルオリンピック(ノルウェー)からは、環境改善に向けたメッセージの発信がオリンピック開催国の役目の一つになりました。国際オリンピック委員会(IOC)の役割の中に「オリンピック・レガシー」という考え方があり、

「オリンピック・レガシー」という考え方があり、

を開催することにより、開催国に良い遺産(レガシー)を残すことを奨励するもので、「環境都市東京」が正の遺産として評価される努力が求められています。

オリンピックの運営と例えば、日本エシカル推進協議会(代表・山本良一東大名誉教授)が、環境倫理(エシカル)の面からユニークな提案をしています。近江商人の「三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)」という倫理的伝統をオリンピックにも取り入れ、エシカル五輪にしようという提言をしています。たとえば、金、銀、銅メダルの原材料は都内で回収した廃棄物からリサイクルしたものを使う、選手村で出される食事は有機栽培、適正に輸入された食品、環境に配慮した養殖で育った魚介類を使うなど、おもてなしの内容も倫理性にこだわっています。実は私どもの財団でも、何度も使えるリユースカップをオリンピック会場で活用し、ゴミの減量につなげようと呼び掛けています。ドイツで開かれたワールドカップでは全面的に導入され、日本のサッカー場でも一部で導入されています。今夏の祇園祭りでも屋台の飲食物にリユース食器が使われ、ゴミを大幅に減らして注目されました。

一般財団法人 地球・人間環境フォーラム  
環境問題に取り組む公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。  
国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。